

柚木かおり（関西外国語大学）

1. 概要

参加した学術会議は、「第3回全ロシア民俗学会（Третий Всероссийский конгресс фольклористов）」で、2014年2月3～7日にモスクワ郊外のサナトリウムを借り切って行われた。本学会は4年に1度開催されており、主催は[ロシア・フォークロアセンター](#)（Государственный центр русского фольклора）、後援はロシア文化省であり、期間中の参加者の滞在費はロシアの国費で賄われる。フォークロアの学会としては最も規模が大きい。今回は文学者 В.Е.ドブロヴォーリスカヤが取り仕切った。概要は、主催者の[該当ページ](#)で見ることができる。

第3回を迎えた今回の学会の目的は、研究者と実践者の対話によって、次の世代に「残すべき」フォークロアの形を議論することである。伝統文化が衰退する一方の現在、ソ連時代のやり方は間違っていたという認識に立ち、見直し、修正せんとする潮流にあって、文化省は歴史に続き文化においても選別を始めた。本学会はそのための専門家の意見を取り入れるための、趣旨としてはロシア国内用の、国益のための場である。

参加研究者の専門は、文学、芸術学、民族学、文化学、社会学、博物館学、医学、生物学など、多彩な顔ぶれが集まる。最終的には各分野の代表が成果を文化省に報告し今後の提案が行われるため、名のある学者や研究機関の研究員や執筆活動を行っている研究者が大勢を占める。また、実践者として合唱団や舞踊団の指導者や職人などが参加していた。なお、本会の趣旨からして、原則として外国人は有用な提案や資料の提示ができないといけない¹。全体の参加人数は470名だった。

2. 行程とプログラム



行程は、初日の開会式後、3日半サナトリウムで缶詰めになり、最終日の午後に閉会式というものだった。

開会式には、文化省からメジーンスキイ大臣の親書を携えてアリストールホフ副大臣（写真）が出席し、専門家が議論した上での文化省への提案を求め、閉会式ではそれに応える形で各セクションやセンターの代表者が上

申書を読み上げた（写真：舞踊研究者 А.И.シーリン）。それらの上申書は参加者の署名とともに、文化省に提出された。閉会式後には、[文化省への参加者全員からの呼びかけ](#)が作成された。

今回のセクションは全部で31あり、学問分野でな



¹ 今回は現地の事情を理解していない外国人の学生およびPDのエントリーが集中し、全体で600を大幅に超えたため、急きょ審査制となった。日本ロシア文学会からも5名がエントリーしたが、2名が選に漏れた。また、筆者が送った2つのエントリーのうち、1つが落とされた。これら3つ分の報告は、ICCEES 2015にて”Russian Folklore Studies in Japan: Taking a New Step”というパネルを組んで行う。

く、テーマによって割り振りされた。全体としては、「現在のフォークロアの実地と研究が抱える問題を様々な学問分野から論じる」もので、理論あり、調査報告ありで、実に多種多様な構成となっている。[プログラム](#) (pp.12-14) は閲覧できるので直接そちらを参照されたい。

会議は10時から19時まで(昼食14時から15時)行われたが、発表者が多く、セッションによっては4時間の持ち時間で10人を超える発表者を抱えたところもあり、1人当たりの発表時間が変わったり、それでも強引に進めて時間が大幅に押ししてしまったところもあった。

夜はワークショップやコンサートが催されたほか、書籍やCD/DVDの販売もあった。全体の催しの外に、各部屋では個人や今後の団体間の共同研究の下準備などの様々なレベルの交流が行われた。交流もまた、本学会の重要な開催目的となっている。



閉会式前夜は、バンケットが盛大に行われた(写真中央は元指導教官のキリユーシナ先生、筆者との間にいるのが今回のトップのドプロヴォーリスカヤ)。食事をしながら専攻地域も専門も全く異なる人たちと話をするのは楽しいものである。コサックやその音楽文化の研究者たちが切れ間なく乾杯の歌(このようなジャンルがある)を歌って場を華やげたほか、舞踊研究者の指導で恒例の民俗舞踊や遊戯が催された。

民俗衣装を着て臨んだ女性たちもおり、写真撮影に引っ張りだこになっていた(写真中央は、熊野谷葉子氏²)。



3. 筆者が見学したセッションについて³

音楽を優先し、ぶつからない範囲で、地域研究方法論、博物館学のセッションを回った。発表者が半端なく多かったため、以下は特に印象に残ったもののみを記す。

芸術学のモスクワの双璧 O.A.パーシナと E.A.ドーロホヴァの報告⁴はいつどこで何を聞いても思考の深さが段違いなのであるが、今回も過不足ない冷徹な分析に感嘆させられた。



音楽セッション«Музыкальный фольклор и этномузыкология: Проблемы и перспективы»では、伝統文化の急激な衰退への危機感と研究の方法論の行き詰まり⁵が見受けられた。また、今回は研究対象が現在から、30~40年前という「少し前の過去」、つまり集めたが未整理になっているフィール

² 今回は、「О полифункциональности частушек на примере традиции среднего течения Северной Двины」という90年代の北ロシアでの自身の貴重な調査映像を見せながらの報告であり、個別に再発表が乞われた。

³ 筆者のロシア向けの感想は、次に掲載されている。Традиционная культура 2014. №2. С.16.

⁴ Пашина О.А. Обрядовое звуковое поведение у восточных славян.; Дорохова Е.А. Фольклорный билингвизм как проблема этномузыкологии.

⁵ 方法論の行き詰まりは、今回全体で器楽セッションが設けられなかった主要因となった。後述のキリユーシナを含めた器楽研究者は、理論や声楽や儀礼のテーマでこのセッションで発表したのである。

ドデータがある時代にシフトする転換点となったように見えた。



危機的状況からの脱出という意味で最も印象的だったのは T.B.キリュージナの報告⁶で、「楽譜にして、分析してそれで終わりという時代は過ぎた。もはや説明を加えないと、何をしているのか、何を歌っているのか、ロシア人自身も理解できないという段階に入った」という見識のもと、自身の初期の調査資料(70年代)を出し、「これは現在ではもうありませんが」と前置きをして民族誌的側面を説明する報告をした。この報告は実際に注目を集め、聴衆も多く、フロアからの質問も多かった。

地域研究方法論《Локальные традиции и культуры: Современные исследования》では、激論の場に行き当たった。近年、資金を得た地方自治体が民族誌を出版するようになったが、非常に出来のまずい論集の発表があった。実はこの自治体は、書く側の人件費までは計上できなかったのだ。各分野の研究者たちは皆一斉に叩き(もう批判のレベルではなかった)、これだけの規模の論集を出すのなら、各専門の研究者を雇えと息巻いた。このような批判一色の中にあって、M.A.エンゴヴァートヴァの「民俗音楽に関してはギーツピウスの類型を守る必要があるが、概して今は何でもありの時代だから皆それぞれにやれるようにやりたいようにやったらよい」という果敢なコメントでフロアは黙ってしまった。それはこの論集だけでなく、もはや何でもありになってしまった現在のロシアにおける最も有効な答えなのかもしれない。

博物館学《Фольклорные архивы и фольклорные материалы в архивах》では、資料のデジタル化の話聞いた。各研究機関のカタログの項目について、それぞれがエクセルの表を示して説明するというものだった。伝統文化が衰退する今、過去のデータの保存と利用は、研究者の最重要の課題となっている。なお、本学会の後、統一カタログを作るという話がフォークロアセンターを中心に進んでいる。



4. 筆者の発表

筆者は日本にとどまらずロシアでも稀なバラライカ研究者ということになってしまっているため、筆者にできることは何かと考え、今回はバラライカに限定したラウンドテーブル《Балалайка: Прошлое и настоящее》を組んで、世話と司会と報告をやってみた。

発表は、「Рекрутские припевки под балалайку на примере Нерехтского района Костромской области」という題目で、ロシア文学会で2010年に口頭発表し、2011年に学会誌に掲載していただいたコストロマ州ネレフタ地区におけるバラライカの伴奏による新兵送りの歌の、今度は民族誌的・音楽的側面を、2000年代初めのビデオ映像を見せながら報告した(次頁写真)。

⁶ Кирюшина Т.В. Традиционная свадьба костромского Поветлужья.



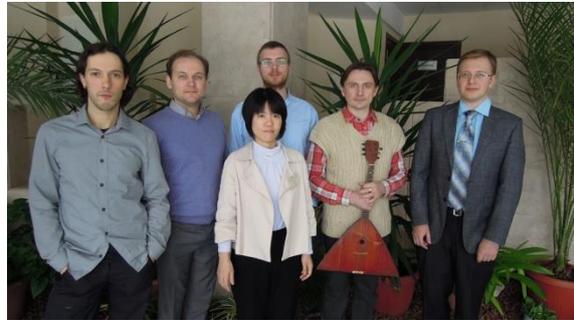
これもまた、今では「失われた文化」となってしまったもので、体系的にまとめないと全体像は見えない種類のものである。発表をもとにした論文は、第3回民俗学会の論集に掲載予定である。

世話と司会であるが、自身の発表よりもこちらのほうが消耗した。これまでバラライカ

に限定したセッションが組まれたことはいかなる学会でもなかったため、とにかく集まろうと声をかけた。近年のロシアでは、80年代生まれの世代がインターネット上で調査を含む自身の活動を発表している。今回集まった面々の職業は様々で、銀行員、俳優、デザイナー、院生で（うち2名は審査に落ちた）、合計6名（1名は自主参加）が報告するセッションとなった。報告の内容も、図像学、レポトリ分析、文化史など多様だった。

割り振りが最終日の午前で、時間が2時間しかなかったため、司会者として質疑応答の時間も十分にはとれず、また研究者と実践者の議論までできなかったのが残念だった。

最も親近感を持ってフロアに受け止められたのは、リペツク州立劇場の俳優（写真中、楽器を手にしている）であった。審査に落ち



たが自費参加を決めた彼のために、皆で自分の時間を削って工面した。「音楽教育は受けていないが、バラライカが好きで5年前から村に入って自分なりに調べている」というこの俳優のプレゼンは、文字通り舞台だった。「好きこそものの」とはこういうことを言うのだろう。

聴衆は20名ぐらい来た。今回は全体で器楽セッションが組まれなかったこともあって、器楽に興味がある人の注目は集めたようだ。ペテルブルクの芸術史研究所、国立民族学博物館、モスクワのグネーシン音大、音楽院から研究者が見え、皆様から「各自が研鑽を積み、若い世代を巻き込みながら、このような集まりを今後もしていくように」と激励をいただいたので、企画側としては御の字である。フロアからは、「もっと学校で民俗器楽を教えてほしい」、「グースリやガルモーニなど他の楽器も何とかしないとイケない」という声もあがった。それらにしても、バラライカの将来にしても、とりあえずは今回外国人が何かしてしまったので、次はロシア人自身が何かしてくれるだろう（と期待したい）。

5. 謝辞

今回の会は4年に1度の大きな学会で、勉強も自分にやれる提案もできて、とても有意義な経験ができたと思う。いつものことながら、研究はロシア語が読めて聞けて話せないのだめだと思ったし、この「何でもあり」の時代に自分はどう生きるのか考えさせられた。

筆者のような非常勤講師の身分には、旅費の助成は経済的に大変ありがたいうえに、研究し発表していく励みになった。今回は特に企画で大変な思いをしたが、やってよかったと思えた。旅費を助成してくださった日本ロシア文学会に心から感謝申し上げます。